

子どもからだに注目しつゝ

山崎 健

はじめに

昨年七月の第一五期中央教育審議会第一次答申では、学校五日制の想定される二一世紀を展望した学校教育の方針について、「生きる力」や「たくましく生きるための健康や体力」などのキーワードが提示された。これを受けての教育課程審議会では、学校教育の教科内容と時間配当の問題をふくめ、教育内容の精選とともにその再編をも視野に入れた作業を進めているものと思われる。

では、二一世紀を睨んだ政界や財界の教育戦略はど

のように考えられているのか。

新潟県長岡市では、一九九六年度より、児童・生徒の情操を高め、一人ひとりが持つ才能を十分に伸ばすことを目標として、当面小学校を数力所単位のグループに分け、希望者に体育系、芸術系、言語系の特別指導を行うという試行を始めている。

「まがりなりにも『平等』『効率』を達成した日本の教育に、これから求められるのは、画一を排し一人ひとりの能力を充分に伸ばすことができるような条件を整えること。『長岡の人材教育』はそのための新しい受け皿です。だれでも必ずもっているキラリと光る才能、

それが専門家の助言でさらに伸びていく。そして特色ある個性が一つ育ち自信がつくと、ほかのことも一緒に伸びてくる。」と長岡市教育委員会は説明している。

「季刊教育法」一〇三号（一九九五年）の特集で、経済同友会の桜井修氏は、永井憲一氏との対談「学校スリム化こそ教育活性化への道」学校に何もかも押しつける時代は終わった」の中で「市民としてもつべき、最低のシビルミニマムは学校でスタンダードに画一的に教えてもらう。しかもそれは基礎・基本に限る。」とし、各教科内容の妥当性と必然性の問題を含め、言語能力、表現能力を「基礎・基本教室」―学校で学び、情操部分、社会的・文化的部分・自然科学的部分は「自由教室」―合校で学ぶとし、「企業の社会的責務の実現」をも含め「学校から合校へ」との問題提起をしている。

では、学校教育（学校体育に限定されない）に求められるシビルミニマムの内容に関わって、子どもの生活や健康についてはどのような問題が存在しているのだろうか。

(1) 子どもの「からだのおかしさ」

一九七八年一〇月、NHKテレビ特集「警告！子ども

ものからは蝕まれている」が放映され、大きな国民的関心をよんでから二〇年近くが経過した。この背景には、子どもをめぐる生活環境の急変、「遊び」や「お手伝い」の減少、塾・教室通い、ファミコンやゲームの隆盛といった現象が存在している。精神的にも身体的にも「遊べない子ども」の存在は、「遊ばしてくれない」「暇がない」「仲間がいらない」「遊び方を知らない」「意欲がない」等々の実態を通じて「子ども文化」や「子ども社会」の崩壊を意味し、地域としての教育力の低下を意味している。また、総運動量の激減とストレスの増加は、大人と同じ運動不足病、肥満、糖尿病といった「小児成人病（生活習慣病）」の危険因子の増加を招いている。

(2) 新潟の子どもは？

我々の研究室ではここ数年間、新潟の子どもに関するいくつかの調査を実施してきた。

①一九九四年、新潟市内の小学生一〇八名の調査では、男子では二時間半から三時間の遊戯時間のうちファミコンゲームをする時間が七割以上を占めている。

女子はあまりゲームは行わないものの学年進行に伴

い遊戯時間が短くなり、塾、稽古事、部活動等の影響が強いことを報告した。また、心拍数メモリを用いた調査でも強い運動を行っている時間の大半は一日で三分以下であり、身体活動量の減少がうかがわれた。

②一九九五年、小学五・六年生と中学一～三年生約二〇〇〇名の調査では、起床時刻は平均して七時以前であるが学年進行に伴い一二分ほど遅くなり、これに対して、就寝時刻は、小学生五年生で午後一〇時を超え中学校二年生では平均午後一時以降となってくる。この点で小学校五年生に比べて中学生では睡眠時間が一時間少なくなかつ夜型の傾向になっている。

また、外遊びの時間は小学生の男子は五〇%以上が一時間半であるのに対して中学生男子や女子では学年進行にともなって、遊んでいる子どもの比率自体が減少してくる。これとは対照的に、テレビやゲーム、マンガに関わる時間は四～五時間と多く、中学生ではこれらの時間が年次進行とともに増加していく。

当然外遊び等の頻度も減っていることから、午後一時になってもあまり眠くならず、また睡眠の深さもそれ程期待できない。小学五・六年生九三三名への「一日のうちで一番頭がさえると思うのはいつですか？」

との質問に対し、六三%の子どもが「午後」と答えていることもこれと関連しているものと思われる。

塾やスポーツクラブについては、中学生の塾通いは過半数で、時間も二時間前後となっている。小学生でも塾とスポーツクラブそれぞれで一時間半ということから「子どもの多忙化現象」が読み取れる。

③一九九六年、小学五・六年生八二五名の調査では、比較的活動的な群と非活動的な群とでは、「朝起きた時に気分がよい」「寝不足を感じない」といった項目に統計的な差が見られた。

また、遊ばない理由については、男子では「遊ぶ場所がない」「楽しくない」、女子では「クラスや部活動で忙しい」となっている。

小学三～六年生六三九名の生活時間と体脂肪率に関する調査では、全体の九一%が塾、習い事、スポーツクラブに参加し、平均で週四回、最高では一回という子どももいた。体脂肪率の高い子ども(男子二〇%以上、女子二五%以上)は男子で二八%：女子で一八%存在し、そのうち男子八〇%、女子六〇%は、身長と体重からみた肥満度では「普通」と判定されているわば「かくれ肥満」でもある。

以上の調査から、現在の子どもの生活時間は、多忙化、夜型、非活動的といった状況にあることが考えられる。多忙化による遊びの減少（身体活動量の減少）夜型の生活リズム、睡眠の質の変化、肥満や体脂肪率の増加などは我々大人も含めて等しく現代的な問題であると考えられる。

(3) 子どもの生活習慣の形成はどうぞ？

このことから、現在の子どものからだや健康、運動の生活習慣に関して重大な問題が存在していることは明らかである。まさに「健康というシビルミニマム」の実現のために学校、地域、家庭での意図的で緊急な取り組みが必要であると思われる。

が、ではどこがどのように責任を持つべきなのか？生活習慣病（成人病）や慢性疾患による国民医療費の増大は、運動や栄養、休養の適切な組み合わせという一次予防（プライマリケア）によって解決されないことはよく指摘される。

本来、このような生活習慣の形成については「家庭」での生活リズム形成に責任がある・・・が大人を含め危機的な状況にあるのが現実である。

特に、生活習慣は行動的な側面が強く、保健や家庭科等が授業時間数の減少にも対応して「合科的生活科学」として「知的理解を保証したとしても、その実現には困難が予想される。

小学校での学校体育、週三回一三五分間の活動で健康と運動に関わる「生活習慣」を形成することは可能であろうか？

そして「総則体育」や「体力づくり運動」は、はたして教科としての「学校体育」を擁護するのか、あるいは教科内容を「健康・体力作り」に矮小化させ、スポーツに関わる内容を「学校から合校へ」外注化してしまうのか？

さらにいえば、学校で求められるシビルミニマムの内容についての各教科の存在基盤や教科再編の可能性の検討も今後求められてくるのではないのか？

その意味では、学校教育個別の教科内容の独自性を議論する以前に（算数は必要だ、体育は必要だ、音楽も必要だ・・・などという議論以前に）、学校教育とその内容の独自性を検討すること。つまりどのような子ども像と学校像を描くのか、さらには地域と家庭との共通の子ども像と地域像をどのように模索して行くのか、

そしてその中に各教科と教師とがどのように関わってゆくべきなのか……を検討することが求められているのではないだろうか？

その議論を進めることが、学校スリム化や「学校から合校へ」という大きなうねりの中で、結果としてすべての子どもの発達の権利と可能性の開花、教師の教育活動の独自性と必然性を擁護することになるのではないだろうか。

おわりに

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、「人間独自の精神の発達とは人類史的所産としての社会的、文化的遺産の獲得によってなされる（人類史的内的実現）」との精神の文化的歴史的発達理論を指摘した。

では、子どもたちにとっての社会的、文化的遺産とは一体どこに存在するのか？

学校の教材か、地域の遊びか、家庭の生活か？

そして、学校・地域・家庭としてそれぞれが子どもに保証すべきシビルミニマムとは何か？

子どものからだの発達や健康（実は大人も含めて）は、子どもをめぐる様々な環境が保障されてこそ、その結

果として実現されるものである。

その意味では、対処療法的な「体力づくり」や「健康づくり、地域づくり、家庭づくりに関わる」にいがたの子育て、親育て、大人育てが問われているのではないだろうか。

（やまざき けん）新潟大学教育学部

